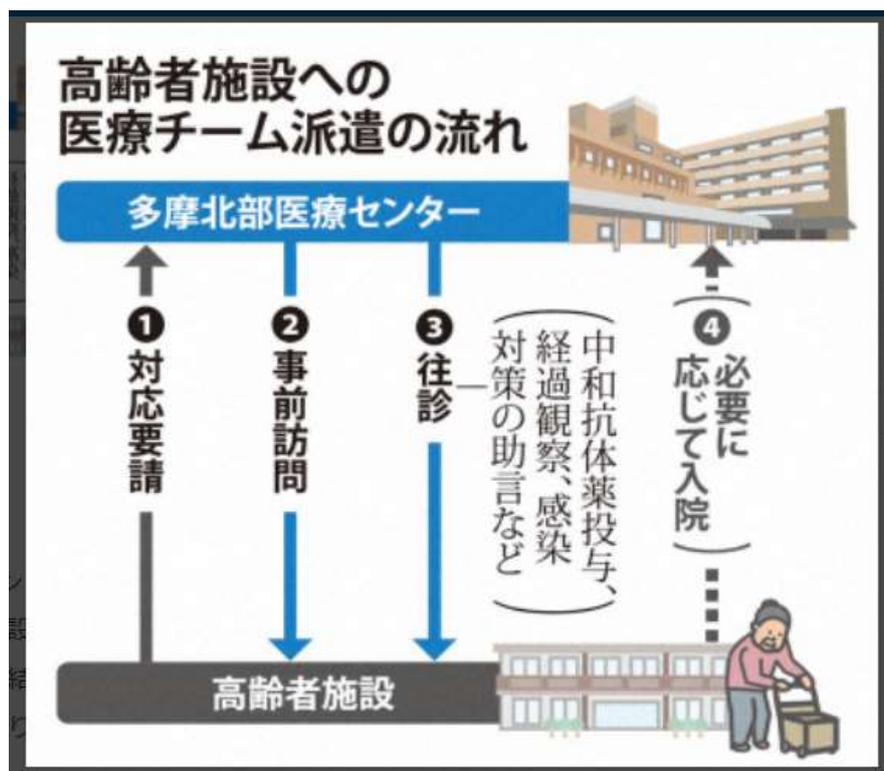


## 病床逼迫防いだ高齢者施設への往診チーム 成否のカギは

2022/5/22 毎日新聞



新型コロナウイルスの感染拡大の第6波では、病床が逼迫（ひっばく）して高齢者施設内で療養を余儀なくされた人の死亡が相次いだ。施設でのクラスター（感染者集団）や重症化の抑制で効果を上げたとして、医師や看護師を派遣する取り組みが注目されている。いち早く取り組んだ東京都の公的病院の一つ「多摩北部医療センター」（東村山市）の事例から成否のカギを探った。

今年1月上旬、センターには、市内の高齢者施設から数人単位の入院要請が相次いでいた。同じ施設内で発生した職員や入所者によるクラスターの兆しだった。院内で協議した結果、1月中旬から要請を受けた施設に医療チームを継続的に派遣する往診の取り組みを始めた。

院内での診療ではなく周辺施設での往診に踏み切ったのは、クラスターで病床が逼迫することへの強い危機感があったからだ。昨年5波では、130床あるコロナ専用病床の9割超が患者で埋まった。入院患者の中には無症状の人もいたが、本来治療や呼吸管理が必要な中等症の患者のベッドを確保できず、入院を断ったケースもあった。

第6波で主流となったオミクロン株は、それまでのデルタ株に比べて重症化の割合が低いとされる一方、感染力が強い。第5波よりも多いクラスターの発生が近隣でも予想されたため、治療に必要な病床を確保しながら軽い症状の高齢者は施設内で治療を受けられる体制づくりが必要と判断した。

往診に先立ち、小泉浩一副院長と感染管理が専門の看護師が施設を訪問。施設の嘱託医から詳細な感染状況を聞き、施設側の意向や環境、一人一人の容体を踏まえて施設内で療養できる患者を見極めた。往診開始と同時に、状態が悪化すれば入院を受け入れる方針をあらかじめ伝えた。

往診先では、入所者への対応に慣れた施設の看護師らと一緒に居室を回り、点滴で中和抗体薬を投与。感染者や濃厚接触者が居住する「レッドゾーン」では、認知症高齢者がいる場合は動き回ることを想定してスペースを広め取るなど、状況に応じた感染管理について助言した。

東村山市の特別養護老人ホームでは、1月下旬に数人の陽性が判明。その日のうちにセンターは医師らを派遣した。最終的に31人が感染したが、入院は10人で19人が施設内で中和抗体薬の投与を受けた。クラスターは3月上旬には落ち着いた。

施設によると、レッドゾーンとそれ以外の場所が一目で分かるよう、廊下に色付きのテープを貼って区分けしたほか、足で踏んでふたを開けるタイプのゴミ箱を導入するなど、チームからは「感染予防の細かい助言が得られた」という。施設長は「病院で診てもらえる担保を得て、精神的にも支えられた。体験した感染予防の技術や知識を忘れないよう施設内で検証し、次に備えたい」と話す。

第6波では、感染しても入院のみならず診察も受けられないまま高齢者施設内での療養を余儀なくされ、死亡した人が相次いだ。国は4月、医療機関による往診を含む施設への支援をさらに強化するよう事務連絡を出した。ただ、センターのように病院を挙げて往診に取り組み支援するようなケースはまれだ。病院の通常診療とコロナ対応の両立が難しいのも一因とされる。

センターではこの2年間、医師や看護師もそれぞれの専門や診療科に関係なく「総掛かり」で取り組み、特定の医師らに負担が集中しないようにしてきた。また、往診は平日午後限定することで、日々の病院業務を過度に圧迫せずに継続することができたという。

**3月まで往診した6施設では約150人が感染したが、そのうち約100人は施設内で中和抗体薬を投与。症状が悪化して入院した人も含めて、全体では約40人の入院にとどまった。多い施設には10回以上派遣したが、多くは数回の派遣で完了した。**

クラスターは、施設内で感染者が広がるにつれて業務も増える一方で、職員が感染したり、濃厚接触者と認定されたりすると出勤できなくなり、感染がさらに広がる悪循環に陥る。同じ日に複数のチームを編成したほか、1チームを複数の施設に派遣して先手を打った。小泉副院長は「初動の段階でチームが介入できれば、最小限の感染で抑制できる」と指摘。センターでは感染管理の専従看護師を配置し、同じ地域の病院から要請を受けて助言したこともあるといい、「看護師の感染管理に関する経験や知識を地域で共有することも重要」と話す。

そもそも、施設への応援派遣を定着させるには1医療機関の努力だけでは難しい。感染症対策に詳しい川崎市健康安全研究所の岡部信彦所長は、「複数の病院や、地元の医師会などから医師らが派遣される場合、施設側と医療側との調整役が必要だ。地元自治体や医師会がその役割を担うなど、地域の実情に応じたやり方を模索してもらいたい」と指摘。さらに「医療だけに任せず、介護もそれぞれの現場で役割分担をしながら、患者にとってよい療養を考えていく必要がある」とも語った。【山縣章子】